人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 12, 155-176.

■　南山大学　人間関係研究センター　公開講演会

関係性の回復に向けて

2012年５月30日（水）
18:30～20:30
南山大学　名古屋キャンパス　Ｒ棟フラッテンホール

玄　侑　宗　久　氏
（臨済宗福聚寺住職・作家）

司会（川浦）：南山大学の川浦と申します。

本日は、南山大学人間関係研究センター公開講演会にお越しいただき、本当にありがとうございます。本公開講演会に、玄侑宗久先生をお招きできますことを、本当にうれしく思っております。

玄侑先生は、福島県田村郡三春町の臨済宗福聚寺第35世のご住職でいらっしゃいます。また、皆様ご存じのように、2001年『中陰の花』で芥川賞を受賞されるなど、文筆家・作家としてもご活躍でいらっしゃいます。

私自身が玄侑先生のお考えに触れるようになったのはごく最近で、2010年に放映されたNHKの「なりゆきを生きる」というインタビュー番組がきっかけでした。この番組の中で、「覚悟を持って現実に向き合い、決然と生きる」ということをおっしゃっていたのが、大変強く印象に残っております。

そして、この「なりゆきを生きる」という言葉は、昨年、2011年3月11日に東日本大震災が起こりましたこと、その後まもなく福島において原発事故が起きましたこと、こうした事態を考えますと、新たな意味・深さを持って私たちに迫ってくるように思います。

玄侑先生は、2011年4月から今年の2月に至るまで、東日本大震災復興構想会議の委員を務めておられました。この委員会におかれましては、医療・福祉・研究・リゾート特区構想ということをご提案されまして、こちらのほうも採択されているというように伺っております。この復興構想委員会の提言をまとめた「復興構想７原則」というものがあるのですけれども、その最初に次のような文言がございます。

「失われたおびただしい「いのち」への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。」

玄侑先生の近著、『福島に生きる』の一節を引用したいと思います。

「膨大な死者を思いつつ、未踏の大地を進んでいく私たちは、明らかにフロンティアに立っている。これから先も「福島に生きる」ということは、フロンティアスピリッツを獲得していくことに違いない。」

現状を見つめ、情報を収集し、提言を発信し続けていらっしゃる玄侑先生は、まさになりゆきを覚悟を持って生きる実践家であられると思います。

それでは玄侑先生、ご講演の方、よろしくお願いいたします。

玄侑：こんばんは。玄侑宗久と申します。

このところ、立て続けにキリスト教系の大学に呼ばれておりまして、キリスト教が最近自信をなくしているのではないかとちょっと心配なのですけれども、そういうことではないようであります。

今日は「関係性の回復に向けて」というタイトルなのですが、昨日の昼間に明日のタイトルは何だったかなあと思って伺ったところ、聞いても覚えがないのです。これは自分で考えたんだろうかというほど、あまり記憶になかったのですけれども、ここは人間関係研究センターというところなので、そういうふうにつけたんだろうなあと思います（笑）。このタイトルでまとめるつもりなので、よろしくお願いします。

「人間」という単語は、もちろん中国でできた言葉です。日本では「人間」と書いて、ヒューマンビーイング（human being）そのものの意味で使っていますが、これはかなり大胆なアレンジでありまして、中国の漢字をアレンジして使うというのは、本当にいろいろやっています。

例えば、「櫻」という字は、本当はサクラの木ではありません。サクラの原産地は日本ですから、中国にサクラを意味する文字があるはずがない。あの文字は本当はユスラウメのことなのですが、まぁユスラウメなんか気にしなくていいだろう、サクラに使っちゃえということで、「櫻」がサクラになりました。

あるいは桂という文字も、中国ではキンモクセイの木です。ですから、桂林にはキンモクセイの並木があります。しかし日本には当時キンモクセイの木はなかったので、カツラという木に使ってしまったのです。

そのように、「人間」と書きますと、本来は存在そのものではなくて、世間とか我々が暮らす社会のことを意味しました。しかし日本人は、人間そのものが世間というか関係性の上に生きている存在なのだという認識だったのでしょう。「人間」と書いて、人そのものを表すことにしたわけです。

「人」という字もよくできています。支え合っているというのですが、あれは男と女だという説もありますが、支えがなくなると倒れてしまうのがやはり男でしょう。上になったほうが先に倒れますと、下のほうがぐっと伸びてくるわけです。ですから、夫の死後、奥さんの余命は17年ですが、奥さんの死後、旦那の余命は２年です。

人間という存在を関係性の上に考えたのが日本人だったということでありま

すけれども、どのような関係性があったのか、人はどんな関係の上に生きているのかということを考えてみますと、まず一緒に住んでいる家族というのがもちろんあるわけですけれども、大震災の後だと、やはり死者との関係も我々の中にかなり色濃くあるのではないかと思います。死者とうまく関係が結べないと、ふつうの生活もなかなかうまくいかないという部分がありはしないだろうか、と思うわけです。

現在、福島・宮城・岩手の３県で亡くなった方が16,000人を超えていますけれども、行方不明という方がいます。行方不明が3,000人以上いらっしゃる。この行方不明とはなんでしょう。

遺体が確認できなくても、今回は死亡届を出していいということになりました。ですから、遺体がなくても死亡したということにできるのですが、死亡届を出してない人が3,000人以上いるんです。不思議に思われるかもしれませんが、死亡届を出してない人でも、お葬式はやりましたという人もいます。

例えば、自分の子どもはいなくなってしまったけれども、着ていた服は見つかったと。その服を小さな棺桶に入れて、火葬してもらってお葬式はしました。そうしないと、万が一死んでいた場合、お盆に戻ってこられないと困るから、というんです。じゃあ、死亡届はと言うと、それは出してないと言うのです。どうしてですかと訊くと、いや、万が一死んでいるかもしれないけれども、万が一ということは、あと残り9,999あるわけですから、どこかで生きているかもしれない、と。どこかというのがどこかは分かりませんけれども、要するに、津波のショックで何もかも忘れてしまって、記憶喪失のまま別の浜に流れ着いて、全く知らない人のお世話になりながら元気でいるかもしれないじゃないですかと言うのです。そんなことはあり得ない、とは言えません。

でも、そういう一縷の望みをかけられて死亡届を出されないという人たちが3,000人以上いるということは、その周りにそういう判断をしている家族親族が少なくとも３人ぐらいはいるでしょうから、約10,000人ぐらいの人々がまだ死んでないのではないかと思っているということです。これはちょっと驚くべきことではないかという気がします。

死亡届を出しますと、お金が入ってくるということの影響もあります。いろいろな要因が絡むのでしょうけれども、それがいやだという方もいます。

死ぬという言葉を皆さんはふつうに使われると思いますが、「死」という言葉は、実は日本の古い古典、『万葉集』や『古事記』には出てきません。『万葉集』や『古事記』のころはどうも死ななかったらしい（笑）。では、死なずにどうなったのかといいますと、「避（さ）る」です。避るという字は、避難の「避」です。ほとんど「去」と同じような意味で、この場からいなくなったというように表記されています。おそらく、人がいなくなるということを「死」という言葉で認識するようになったのは、仏教が入って以後だろうと思います。それまではやはり、「避った」のであって、ここからはいなくなったけれども、死んだの

ではない。ただ、仏教の「死」というのも輪廻というのを絡ませて考えますと、ここにいたあの姿はなくなったけれども、何かは続いていると思っていたわけです。

日本に入ってきた仏教の場合、だいたい輪廻という考え方を取り外してきています。本来の輪廻という考え方からすると、先祖にブタがいたりウシがいたりということになるため、これは中国の儒教が許さなかった。先祖にブタがいる、そんなことは許せないということで、中国において輪廻という考え方は仏教から切り離されます。切り離した形で受容された仏教が日本にやってくるわけです。

亡くなるにしてもどこかへいなくなるにしても、いずれにしても、我々が住む社会の外に行くことになります。外の世界に住む人のことを、中国では「鬼」と表現しました。鬼とはもともと死者のことです。雲を意味する「云」に鬼と書くと「魂」（たましい）ですね。「白」に鬼も「魄」（たましい）です。こちらは白い骨に宿る魄、魂（こん）のほうは上に上るたましい、それが両方合わさって魂魄になるということです。

日本という国は、今回の大震災以後皆さんもお感じになったと思いますが、とにかく天災の多い国だなあと思います。神様はいろいろいます。キリスト教の神様ではなくて、日本の八百万（やおよろず）の神様ですけれども、日本にしかいない神様がいます。日本にしかいないといっても、天照大御神（アマテラスオオミカミ）も日本にしかいません。ただ、あの方は太陽の女神ですから、その意味ではアジア一帯にいるわけです。ヨーロッパに行くと太陽は男性神になりますけれども、とにかく太陽の神はどこにでもいるわけです。では、須佐之男（スサノオ）はというと、風の神ですからギリシャ神話にもいます。そういう意味で、日本にしかいない神とはいったい誰か。

これは大穴牟遅（オオナムチ）の神といって、鳥取県伯耆の国の国づくりを少彦名（スクナビコナ）と一緒にやったと言われています。大穴牟遅というのはもともと「大穴持ち」です。大きな穴、つまりこれは噴火口です。鳥取県の大山は、元は富士山のようにきれいな山だったそうですが、上半分が吹っ飛ぶ形で噴火しましたから、その被災者も出ています。そして、それを復旧するために、大穴牟遅の神と少彦名が協力したという神話になるわけです。

日本の神はややこしいことに、どこで何をしたかということで神様の名前が決まりますから、別のところで別な仕事をすると、別の名前になるわけです。大穴牟遅の神も、伯耆の国から次に出雲に行きますと、皆さんご存じの大国主（オオクニヌシ）になります。ですから、大国主と大穴牟遅の神は同一人物なのです。いろいろ申しましたが、要するに日本にしかいない神は、噴火口の神だと申し上げたかったわけです。ですから、噴火はあるわ、地震はあるわ、津波は来るわ、そしてまた、木造住宅ですから火事はある、台風も散々来ます。大変な天災の国です。

富士山もこれまでに巨大な爆発を３回経験していますけれども、今回有名に

なりました貞観の噴火の前に、延暦の噴火というのがありました。その後、江戸時代、1706年に宝永の噴火というのがありますが、やはり富士山というのはすごいです。この学内にも富士山の写真のポスターが張ってありましたけれども、富士山というのは噴火をするたびに高くなったのです。こんな山はほかにはありません。紀元前の富士山は3,000メートルなかったと言われています。噴火しながら大きくなるというのは、めったにない山であります。

そんなふうに天災が多い中で、日本人独特の考え方・感じ方、それを示す言葉、あるいは態度ができてきます。『万葉集』を眺めておりますと、ときどき「なつかし」という言葉が出てきます。「なつかし」という意味の言葉は中国にはなかったのですが、日本人は和語としてしょっちゅう使っていたわけです。ですから、「なつかし」というのを中国の漢字の中で探すと、はっきり言ってないのです。「なつかしむ」という意味の漢字はなかった。現在は「懐」という字で代用していますが、辞書で調べてみると分かるように、あの字には思うとか抱くというような意味はありますけれども、なつかしむという意味はありません。代用しているだけです。

『万葉集』はご承知のように、簡単な文字はもう既に訓読みにしています。しかし、そういう文字、そういう意味のぴったりした言葉がなければ、完全に当て字にします。『万葉集』に出てくる「なつかし」は、「夏樫」と書いてあります。中国人は、はっきり言ってあまりなつかしまない(笑)。王朝が倒れると、本も焼き尽くす、人も殺し尽くすというように、なつかしむどころの話ではない。どちらかというと、革命的に変えていく、過去は振り返らないと言ったほうがいい。

ところが日本人は、天災が多かったということもあると思いますが、とにかく「なつかし」む人々だった。夏樫という言葉は、使用回数までは数えていませんが、とにかく『万葉集』の中にたくさん出てきます。

夏樫の目的語は、「誰」「それ」と言ってもいいのですけれども、普通なつかしむ対象は誰かの「面影」です。面影も、日本語にはありますが、おそらく英訳は難しいでしょう。日本人独特の感性です。だから我々は、今回の津波もそうですけれども、とにかく忘れられない人たちは死んだとさえ認めたくない人たちで、それがたくさんいるのです。その面影がよみがえって仕方がないわけです。

日本人は、そういう目にたくさん遭ってきたと思います。ですから、自然にそういうものに対処する生きかたをするようになります。どういうことかといいますと、この国独特の挨拶を考えました。日本人の挨拶の基本は、深々と頭を下げることです。これは世界的に珍しい。エスキモーも変わっています。近づいて口を開いて、いきなりベロを出して付け合うという、すごい挨拶です。それも変わってますが、我々の挨拶もじつは凄い。

日本人は深々と頭を下げあい、しかも「こんにちは」と言いながら、何をし

ているのか。まず深々と頭を下げて、さっきまでのことを全て捨て去るのです。そして、生まれ変わって白紙に戻って敷居を跨ぐ。敷居を跨ぐ瞬間に生まれ変わるのです。そして「一」に戻るといいますか、ニュートラルになって客を迎える。お客さんが来たときでも、夫婦げんかをしているかもしれないでしょう。そんな波立った気分をいったん寂滅させるわけです。そして起き上がったときには、もう夫婦げんかのことなど忘れてないといけない。なんでこんなときに来たんだというタイミングで来る人がいますが、そうも言ってはいられませんから、こちらが白紙になるわけです。うれしいときにも来るかもしれない。でも、うかれて会ってどうするのか。やはり、白紙に戻って会うわけです。

こうした心の動きを仏教的には「寂滅現前」といいます。いったんそれまでの自分を鎮めて寂滅し、白紙になってニュートラルで客と会うわけです。

ではなぜ「こんにちは」と言うのか。これも珍しい挨拶です。ふつうは、「グッドモーニング」でも「グーテンモルゲン」でも「ボンジュール」でも「ニーハオ」でも、「グッド」、あるいは「ボン」、「ハオ」という、言ってみれば祈りの内容というのでしょうか、あなたにとってよい日でありますようにというように、「よい」という言葉が入るのです。

日本人の挨拶はどうでしょうか。英訳したら怒られます。「Today is ･･･ 」今日はいったいどうしたというのでしょう。どんな祈りが込められているのか、ちょっと分かりませんが、じつはそこには最大限の意味が込めてあるわけです。こんにちはの「は」というのは強調の副助詞といいますが、そこに込められた意味は、今日「は」とにかく昨日までと違って、生まれ変わったような１日であってほしい、昨日の続きであっては困るという願いが込められている。それが「こんにちは」です。いわば「今日こそは」なんです。

そんな大事なことをなぜ省略するのか。大部分の日本人は、「こんにちは」の意味を分かっていないのではないでしょうか。日本人は省略が好きです。「君が代」もそうでしょう。「君が代は　千代に八千代に　さざれ石の巌となりて　苔のむすまで」、副詞句を並べただけで終わっているではないですか。苔のむすまで、どうだというのか。なぜ大事なことを省略するのか。「惻隠の情」と言いますが、日本人なら分かるだろうということなのでしょうけれども、今や言わないと分からなくなってきています。

「こんにちは」もそうだろうと思いますけれども、昨日の続きであっては困る、そのくらい、昨日というのが思い出したくないつらいことにあふれている。特に、災害というのはそうです。ですから、さっきは夫婦げんかと申しましたけれども、そうではないと思います。死というのがやはり周辺にあって、その悲しみから立ち直ってから客を迎える。そして、今日は昨日の続きではいけない。悲しい気持ちもいったん寂滅させて今日はまた新たに生きようではないか、というのが我々の挨拶なのだと思います。

私はこのことを、「無常」という法則の行動化であると思っています。世の

中は無常に変わります。しかし世の中が無常に変わることに戸惑って、悲しんでいるだけでは仕方ないじゃないか。こっちも無常に変わってやろうじゃないか。いや、実際、無常に変わっているわけですが、それを自覚しようじゃないか、ということです。昨日の続きなんか生きないで、今日からまた出直すんだと、先輩達は考えたのではないでしょうか。

日本人は一から出直すのが好きです。先輩達は「諸行無常」という仏教的な概念の「諸業」という上着を取ってしまって、単に「無常」という非常にカジュアルな姿にして、我々の身近な感覚に入れ込んでいった。そして、我が身も無常であろうとすることで、無常の世の中を生きやすくしていったのだろうと思います。ですから、こんなに災害の多い国だからこそ、「こんにちは」という寂滅現前の挨拶なのです。

ところが、そうはいっても、人には忘れられないことがあります。あるいは、忘れてはいけないだろうということがあります。身内の死というのもそうでしょう。忘れたいと言ったら変ですけれども、日常に戻りたいのです。悲しみから癒されるということは、日常に戻るということです。しかし、日常に戻りきってしまったら、忘れるということにもなりかねない。忘れたくはないし、日常にも戻りたい。この板挟みの中で、我々は儀式というものを作り出す。そのときだけ集中的に悲しめばいいじゃないかという儀式を持つことで、我々の悲しみは自覚的に特定の時間に集中することができるようになる。朝から晩までだらだらと悲しんでいるというのは、日常生活が立ち行かない。ですから、朝、集中的にそういう時間を持つことで、あとは会社にふつうに行くということができるようになってきます。

しかし、なかなかそのようにできないという状態もあります。無常であろうとするのですけれども、ずっと頭の芯から離れない、忘れられない、忘れてはいけないとも思う、なかなか日常生活が立ち行かない。こういうことがやはり生きていると起こってきます。

それを昔は、「あはれ」、あるいは「もののあはれ」と表現しました。あはれという言葉は、『古事記』や『日本書紀』、『万葉集』にも既に出ております。しかし、やがて「もののあはれ」というように進化してきます。もののあはれ、これは『土佐日記』や『大和物語』、あるいは『拾遺和歌集』あたりに出てくるようになります。

本居宣長が江戸時代後半に、『源氏物語』を論じた『紫文要領』という文章の中で、「もののあはれ」がいかに日本人の美学を作ったかということを述べています。それによりますと、簡単に申し上げれば、我々は無常であろうとするのですけれども、どうしてもわだかまっているというか、変わりにくい自分の中の思い、記憶がある。その思いを、もののあはれというわけですけれども、人情や世の中のことがよく分からないと、もののあはれというのは分からない、と書いてあります。ですから、我々としては、まずとにかく無常であろうとし

たわけです。とにかく一から出直す。しかし、それでもリセットできないもの、そういう「無常と拮抗する力」、これをもののあはれと言ったのだと思います。

一から出直すといえば、例えば世阿弥は「初心」ということを言っています。「初心にかえれ」と言っていますが、初心にかえれというのはいつにかえればいいのか。まだオムツをはいているころに戻ったら初心になるのか。そうはいかないでしょう。やはり50代には50代の初心があり、40代には40代の初心がある。そのように世阿弥は言ってますから、その歳なりに身に付いていることは「初心」のうちです。身に付いていることはそのままに、頭の中にあることをとにかく払い捨てる、払い除けるというか、無心になるということだろうと思います。

「一に戻る」や「裸になる」ということは、すでに日本人の美学になっていて、それが完成するのがおそらくお茶の世界だろうと思いますが、千利休がうたいます。

「稽古とは　一より習ひ　十を知り
　十よりかへる　もとのその一」

だから、いろいろ学ぶのはいいのですが、学んでいって身に付いていないものは、ちりやほこりのようなものです。身に付いているものというのは、頭ではなくて身に付いたのですから、無意識にできることです。それだけが美しい。もちろん新たなことを学ぶのはいいのですが、完全に身に付いて無意識になるまで習熟しなければいけない。別の言いかたをすると、身に付きすぎて忘れるぐらいやらなければいけないわけです。

要するに、なぜ私がこういうタイトルで話をしているのかと言いますと、復興する、復旧するということは、結局、関係性が回復されればやっていけるのです。何か足りないものがまだあったとしても、いろいろな関係性が回復されればそんなことは問題じゃありません。その一つが死者との関係であり、途中から自然との関係もちょっと入ってきたと思うのですが、今回の出来事を受けて、死をも含んだ自然との関係が改めて今、問われていると思います。

津波・地震、この危険性は今やどんどん増しております。世界の400分の１の面積のこの国に、世界に起こる地震の10分の１以上が起こっているわけです。とてつもない話です。富士山の北側、富士吉田と富士宮の距離が、2009年のGPSによる計測では、２センチ増えています。膨らんだのです。富士山が膨らんだ理由は、溶岩が滞留したとしか思えない。考えてみれば、1706年ですから、前の噴火から300年以上経っています。いつ来てもおかしくない状態です。こういう中で、自然との関係というのはどのように保っていったらいいのか。

田老町に、万里の長城と言われる防潮堤がありました。高さ10メートルでしたが、今回10メートルではどうしようもありませんでした。一番低かった福島県でも、相馬や南相馬の辺りは15メートルの津波だった。津波というのは波と言うから紛らわしいのですが、あれは波ではない。波には波長があるでしょう。

一番低いところから次の低いところまでの長さを「波長」と言いますけれども、今回の津波の波長は200～300キロメートルあったのです。だから、上がりっぱなしでずっといくわけです。200～300キロメートル先でようやく下がる。波が来たというよりも海が来たということですね。じゃあ15メートルの津波が押し寄せた地域はどうするのか。その海と戦うのか。戦うといっても今回、最大の力を向こうは出していません。日本に押し寄せた津波でかつて最高のものは、1760年代に小笠原にやってきた津波で、高さ85メートルだそうです。すると、90メートルの防潮堤を造らないといけない。15メートルの波が来たから16メートルの防潮堤を造りましょうという人が実際いるのだから驚きます。しかし、16メートルの防潮堤を造った海というのは、海岸線からの距離にもよりますが、まず泳ぐ場所ではなくなります。しかも、住んでいるところから船は見えません。つまり、漁をする場所でもない。海に、敵としてずっと向き合うという態度をとるということです。敵と言っても、身内がまだ海にいるのです。それを敵に回せるのか。回せないから怯えつつ、なだめて奉るという方法を日本人はずっととってきたわけです。綿津見神（わたつみのかみ）といって、海そのものを神にして奉ってきた。戦うということを決してしなかった。

でも、またきたらどうするのか。ここで国の役人たちは、おおむねコンクリートの物を造らないではいられない。なぜそんなにゼネコンに奉仕するのかと思うのですけれども、ゼネコンに奉仕するだけではなくて、今の風潮として何もしないではいられないのです。二度とこのようなことが起きないように、こうしました、ああしましたという書類を提出しないといけないでしょう。だから、バスの運転手が事故を起こしましたが、何かシステムが悪かったのだろうと考える。システムではないと思うのですけれども、システムのほうも二度とこのようなことが起こらないように改訂してくるわけです。そうすると、関係ない人が非常に棲みにくくなっていくということが起こってきますが、これは仕方がないと考えているようです。普段は味方なのに、たまに敵になる。たまにくる敵と味方が一体になっている。どうしたらいいのか。たまにくる敵が今回よりも大きいかもしれない。そういうのとどうやって付き合っていくのかという問題です。やはり、自然観が問われているのだと思うのです。

しかし、自然の驚異そのものを神として奉ってきたこの国において、とるべき態度は決まっているはずです。ただ現状では、海岸線があまりにも人工化してしまった。「白砂青松」と言いますが、マツばかりでは弱い。間にタブノキやツバキ、サカキなど、常緑の潅木がいっぱい入り組んで生えているのが理想です。こういう日本の昔からの海岸の様子が、復活してほしいのです。日本は、第二次世界大戦の空襲で森がかなりなくなりました。なくなった森が、岩手県一つ分だったと言われています。しかし日本人は勤勉に植林をします。結果的には岩手県一つ分の植林をしたのですが、その木はスギ・ヒノキ・カラマツだけです。なぜこんな根の浅い木ばかり植えたのですかというぐらい根の浅い木

で、しかも、それがスギ花粉の問題まで引き起こしています。もともと生えていた木にしましょうということで、常緑の照葉樹が選ばれて、それを植えていったら、かなり海岸は強くなるのではないでしょうか。そういう運動をしている人々がいます。

松島を見てください。確かに松島は、ほかに無数の島という要素もあります。松島にやってきた津波は、瑞巌寺の門を少し入ったところで遠慮するように止まったのです。まさにパワースポットですね（笑）。

やはり自然との関係に、今、日本人は自信を失っています。つまり、ここしばらくこんなに大きなことはなかったですから、西洋風の考え方で固まっていた。西洋風の考え方というのは、自然はコントロールすべきもの、かなわない敵ではない、というものです。

その考え方は、要するにドラゴンに対する扱いですね。ドラゴンはサタンの使いです。龍とドラゴンを一緒だと思っている人がいますが、特に中日ドラゴンズの本拠地の人たちにはそういう誤解がありますけれども、実は違うのです。龍は中国人が考えた。天候の変化はいったいどうやって起こるのか。こういう生き物がいるのではないか。こういう生き物がいて、こういう生態なので、冬場になると、水の中に潜んでしまうから雲が少なくなる。春になると空に上がってくるので、春霞が立つ。それでまた暴れたりするので、夏頃から竜巻も起こったりいろいろするわけですが、同じようにヨーロッパ人もそういう生き物がいるのではないかと思ったわけです。それがドラゴンですが、龍とドラゴンは明らかに違います。ドラゴンは背中に羽がありますが、龍はないでしょう。別の生き物なのです。

インド人もまた似たようなもので、ナーガというものを考えました。これは巨大なヘビのようなものですけれども、いずれも自然の象徴です。人間にはコントロールできにくいというか、はっきり言って制御できません。でもヨーロッパ人は、それをドラゴンというサタンの使いと認識してましたから、人間がせっかく予定どおりやろうと思っていることを邪魔する存在でした。なんとしても制圧すべき敵なのです。

しかし龍は違います。ではどう違うのか、龍とはどう付き合うのかというと、日本人というか東洋人は、龍に味方になってもらわないとうまくいかないと考えたわけです。とても退治しようなどという相手ではない。

でも、ヨーロッパの人々にとっては、思うようにならないことはまずいことなのです。マニフェストやマニュアルが最近流行っていますが、そのとおり行くことがどうも彼らの理想らしい。最近ではデートに行くときのマニュアル本まであります。公園へ行って、そこで何分ぐらい話すと夕日がちょうどあの辺に来るので、こういう話題をふってはどうか。その後、近くにあるこういうレストランへ行って、こういうものを食べてはどうかと、その本を見ながら計画を立てておくわけです。ところが、現実は予定どおりいきません。彼女が夕日

よりもCDを買いに行きたいと言い出したものですから、すべての計画が崩れてどんどん不機嫌になる。計画通り行かないものですから、何のためのデートだったか分からなくなるぐらい腹が立ってくる。思うようになってほしいという欲求が強いと、大変困ったことになるわけですけれども、龍と付き合うということは、思うようにならないこととどうつきあうかということです。

被災地に、ブータン国王夫妻がやってきました。何をしに来たのかというと、「親愛の情を示しに来た」とはっきりおっしゃいました。悼み、慰め、励まし、そして一言で言えば、親愛の情を示しに来たのです。親愛の情を示すという用件だったのです。今では、そういう用事で人の家に行ったら、追い出されるんじゃないですか。「ごめんください。親愛の情を示しに来ました」と言ったら、何を企んでるのかと疑われますが、親愛の情を示すというのは本来、とても大事な用事だったのではないかと思います。

私の住んでいる東北地方ではそういう習慣がまだ残っています。たとえば午後３時になると、どこの家に出かけていってもいい。何をしに来たのかというと、お茶を飲みに来たのです。そして、必ず30分で終わります。それ以上続くということはないのですが、３時から３時半まではどこの家へ行ってもいい。たいして用事があるわけではないのですが、何の予告もなく近所の人が来たりする。そういう地域なのです。だから、親愛の情を示しに来たというのはとてもよく分かります。

そのブータン国王が、相馬の小学生に向かって、こんなことをおっしゃいました。「君たちの中には１匹ずつ龍が住んでいる。龍は経験を食べて大きくなる。今回の体験は龍のえさです。自分の中の龍が大きく育つ体験です。だから、皆さんは自分の中の龍を今後とも鍛えて、育ててください」。自分も一つの自然なのです。人間も一つの自然だから、龍が自分のなかに住んでいるわけです。

この自然というのが本当に難しい。「あなた、ちょっと不自然じゃないの？」なんて気楽に言いますが、誰にでも簡単に自然が分かるはずがないじゃないですか。誰かがそれは自然だと言ったとしたら、それはすでに自然ではありません。自然はもっと人間の理解を超えなければいけない。

「寒九の雨」という言葉をご存じでしょうか。大寒から九日目に降る雨のことをいいます。大寒の後は、雪が降るのがふつうですが、大寒から九日目ぐらいに寒が緩んで雨が降るというのです。そこまで微妙な観察を日本人はしているのです。九日目ぐらいに雨が降るのは自然だというわけです。そこまで自然というのを理解した上で、不自然という言葉も使わなくてはいけません。

日本が震災のさなか、あのころタイも大変でした。ちょっと日本人には理解しがたい洪水で、なぜあんなことが起こるのだろうか、あの水はいったいどこから来るのだろうか、と思った人も多いと思います。何日も前に降ったものがああやって押し寄せるというのは、日本では考えられない、信じられないですけれども、あれがどんどん押し寄せてきたとき、プーミポン国王はタイのメコ

ン川の流域にある病院に入院されていました。その病院からメッセージを出されたのです。それは「王宮を守るための特別な処置は一切するな。バンコックを守るための処置も一切するな」というお言葉でした。王宮だけは守りたいとか、バンコックだけは大事だから守りたいと言うと、その周辺の被害が広がるということです。バンコックの直前の町や村は、バンコックを防護するために、被害が拡大するわけです。それだけはするなと国王陛下はおっしゃったのです。でも、実際はバンコックの被害を少なくするための処置をしていました。

埼玉はともかく、東京だけは救わないと、という感じの動きがやはりあったわけですけれども、それをするなということを、プーミポン国王はメッセージとして出したんですね。要するに自然に任せて何もするなということなのです。それができたらすごいと思います。今度津波が来たときに、自然に任せなさい、何もするなと言っても、日本でそれはできないでしょう。誰かがそうしますと言っても、おそらくそんなことは許されないでしょう。二度とこのようなことが起こらないように万全を尽くしましたという態度をとらないと、日本は今、許さなくなっています。

一時帰宅というのがありました。20キロメートル圏内の警戒区域に住んでいた人が、一時帰宅を許されました。あのとき、みんな白い防護服を着ていましたが、あれはなにか役に立つのでしょうか。放射線は防げません、素通りします。ただ、もし放射性物質が舞い飛んでいれば、付着するのは防げるでしょう。けれどもあの時期は、もうほとんど舞い飛んでいなかった。しかも、あれをはくとトイレに行けないのです。それで、一時帰宅は２時間以内。２時間という短さで、そんなに危険なのかと思わせてしまいましたが、じつはそれはトイレの都合だったんです。あんな服装をする必要が、一体どこにあったのか。もう、ほとんど地面などに付着しているところから放射能が出ていただけです。防護服はそれを防ぐ何の役目もなさない、鉛も入っているわけではない。でも、まるで口蹄疫のときのような、病原菌相手のような服装をさせたわけです。それで、ああ、これは大変な土地なんだなと、みなが見て思ってしまったのではないでしょうか。

死者との関係、そして自然との関係は、ここで語り尽くせない難しい問題ですが、いろいろと述べてきました。

先ほど、ブータン国王が親愛の情を示しに来たという話をしましたけれども、人間関係はどのようにして発生するのか、その辺りを考えてみたいと思います。

最初、家族というのがありますけれども、家族から関係が広がっていこうとするときには、横のつながりだろうと思うのです。横というのは、対等の立場での連帯でどんどん広がっていく。そして、地域社会で、親愛の情を示しにお茶を飲みに行っているような関係がある程度広がるわけです。

そこで、人間関係の中で新たに縦の関係が必要なのではないかということになってくる。これは、ある程度集団が巨大になってきたということがまずあり

ます。それと、外敵が現れたということです。そうすると、集団には何より機動力が問われる。それから、全体が一つになるという一体感も問われる。そのときにこの集団の中に、縦の力が芽生えます。

組織の作りかたというのは、日本人はわりと自然発生的なままやってきました。縄文時代は結構大きい集落です。三内丸山遺跡を見ると、一つの集落に500人以上住んでいました。500人・1,000人という集団が一緒に住んでいるわけです。これが、唯一動物に勝つ方法だったのでしょう。１対１でクマに勝てる人はいません。クマが近寄ってこないほどの集団を組んで、暮らしていたとしか考えられない。クマでもオオカミでも、彼らが持っているような牙も爪も人間にはありません。でも、人間がなんとか生き残ってこれたのは、やはり集団を作る能力に長けていたからではないか、という気がするのです。

今回こういう事故が起こってみると、どの程度が適当な集団なのだろうかということが、とても意識されます。

小泉首相のときに、平成の大合併という、札束で横っ面をたたくような合併がありました。合併すればお金をやるよというような合併でしたけれども、私が住んでいる三春町は合併を断り続け、不思議な状況になったのです。郡山市があって、その東側が田村郡だったのですが、田村郡全体で田村市になろうということで、三春町にも入ってくれないかと言ってきたわけです。田村という名前はうちのお寺の開基の田村家の名前からきていますから、三春町が入らなかったら仏作って魂入れず、目がない龍みたいなものです。しかし何とか入ってくれないかと言われても、図体が大きくなるとろくなことがないですから、いやだと断りました。

西の端の三春町が断り、東の端の小野町も断って、真ん中に市ができた。郡山市と田村市があって、田村郡三春町と田村郡小野町が飛び地になってしまったのです。そのように、巨大になるということをどんどん目指した人がいたんです。

最初に中央集権というありかたを知った人は、おそらくローマ教皇をトップとするビショップ、神父さんたちのヒエラルキーというのでしょうか、これを知ったのだと思います。なんて機動力があるのだろうか。上の一言でぱっと広まるし、こんなに動ける。それを知ったのが信長でした。信長が日本で最初にワインを飲んだと言われていますけれども、「鳴かぬなら　殺してしまえ　ホトトギス」。誰が作ったのかは分かりませんが、実にうまい。

秀吉は、「鳴かぬなら　鳴かせてみよう　ホトトギス」。家康は、「鳴かぬなら　鳴くまで待とう　ホトトギス」。やはり江戸があれだけ続くというのはすごいことだなあと思うのですが、最終的に家康が作り上げたのは、いわゆるピラミッド型のヒエラルキーではないのです。一応、譜代・親藩・外様という枠組みはあっても、譜代なら譜代で全部一緒かというと、違うのです。外様でも、例えば島津藩などは扱いが全く違います。かつての歴史上の関係をみんな取り

込んで、個別の関係を結んでいるというのですか、徳川家は各藩とそれぞれ歴史に応じた個別の関係を結んできた。単純なヒエラルキーの図式ではないのです。あれが実に、縦と横のほどよい感じかなという気がします。

要するに、私が言いたいのは、関係性の回復です。死者との関係を最初に申し上げました。それから、自然との関係は、今後、いったいどう取り結んでいくべきなのかのか、問題提起しました。震災前にすでに、日本古来の関係性ではなくなってきていたという気がするわけです。ほとんど無意識にそうなっていたことがとても怖い。防潮堤を造るというのが当たり前みたいな感じでしたよね。

でも、こうなってみると、結構それに反対する動きが出てきています。コンクリート物を造らせないという動きが、気仙沼辺りから出てきているわけです。自然とそこの住民との関係をどうしていくのか。これは単なる震災前の回復では済まないのです。もう少し前に戻らないと、強い、良好な関係にはならないような気がします。

そうやって死者と自然について話し、その後は人間関係というところで縦と横という話になったわけですね。人間関係ということを考えると、今回大震災を受けて最後の救いになったのは、横の連帯です。各行政の町村長たちは本当によくやってくれましたけれども、決して知事や国ではなく、小さい町や村のまとまりの中で、トップ、あるいは役場の職員たちを信じることができた。だから震災当初、パニックにならずに済んだと思うのです。ただ、今後の問題も非常にたくさんあります。

とにかく、福島県民は全国に散らばっていますから、今後いったいどうなるのでしょうか。なぜ散らばっているのかは分かりますが、その対処法は結構難しい。散らばった人の大部分は、３月15日、16日あたりの爆発が恐ろしくて、より遠くまで出たのです。でもそれだったら、政府がその時点では信用できなくても、大体落ち着いてきた今、なぜ戻らないのか。それは、県外に行っている人たちは、いろいろな理由があるのでしょうけれども、まず福島県はいまだに人が住まないほうがいいほど危険だと本気で思っている可能性があります。そして、そういう話をわざわざする人もいます。

それから、もし福島県でこの子が育った場合、将来この子は結婚できないのではないか。だから、福島県で生まれはしたものの、育ちは名古屋です、静岡ですと言いたいのかもしれない。真相はちょっと分かりません。

でも、かなりの不便をかこちながら、あちこちで世話になりつつ暮らしていると思うのですが、純粋に放射能に怯えているという話だと、つじつまが合わないところがあるのです。例えば、白河辺りからも県外に避難しました。白河から神戸に行った人もいました。しかし実は、神戸のほうが白河よりも放射線量が高いのです。

今の全国的な放射線量はご承知ではないと思いますけれども、愛知県はそれ

ほどではないですからご安心ください。しかし、けっこう高いところもあるのです。2002年の長瀬ランダウアの調べですと、年間１ミリシーベルトを超えているところが11県あります。滋賀県もその一つですが、その時点で一番高かったのは富山県です。富山、石川、この辺りが１・２番を争っています。富山、石川、福井が並んで高いのですけれども、なぜあの辺が軒並み高いのでしょうか。しかも、あるとき突然トップに躍り出てきた。やはり、中国から黄砂に混じって飛んできたのでしょう。この話を出してしまうと、ほかの話とうまくつながらなくなる。論理的な進行がしにくくなる。でも、出さないのも変だと思うのです。

一つだけ最後に話しておきたいのは、人間関係という観点から、いろいろなことを考えていくというのはすばらしいことだと思いますが、現代人はそういう考え方もする一方で、もう一つ、人権という見方もします。

「人権」という言葉は聞いたこともあるでしょうし、大事なものだと思っていらっしゃると思うのですが、この言葉を使うと、いろいろなものが組み込まれてしまうという面があります。今回、2012年１月８日ですが、双葉町の井戸川町長が中間貯蔵施設を巡って、「双葉町民も同じ日本国民ですか。法の下に平等ですか。守られていますか」と会議で発言しました。あれは、どう考えても人権意識です。人権意識があの段階で出てきてしまうと、中間貯蔵施設は決まりません。決まることはまずあり得ないです。どこの町も、うちの町には造らないでいただきたいと言う権利がある。どこの町の人々にも、自分の土地の近くには造らないでほしいと言う権利がある。人権という見方をすると、そうなります。これがあの時期に出てきてしまうと、もうどうしようもない。人権というのはある種、爆弾です。

国家が何かをするということは、一部の人々の人権を踏みにじる行為です。何をやろうと必ずそうなります。

例えば、成田空港ができました。成田空港に反対で、小屋を作って抵抗していた人が、最後に撤退したのは一昨年です。それを知ってか知らずか、我々は成田空港は便利だといって使ってきたわけです。でも、あれを造るために、どれだけの人権が踏みにじられてきたか。それを承知で、うまく人権蹂躙に見えないための施策をうつというのが、政治的な力です。

ところが、そういうことが今の政権はどうもできない。人権を主張されるとすぐに手を離してしまう。

沖縄の基地問題もそうです。ああ、かわいそうにと誰でも思うかもしれませんが、かわいそうにだけでは政治は進まない。代わりを着々と見つけなければいけないわけですが、やはり見つかりませんでした。福島県の中間貯蔵施設も、30年以内にどこかへ持っていくそうです。しかし、そんなところがあり得ますか。あり得ないとすれば、中間貯蔵なんて逃げ口上を言ってないで、別の貯蔵の仕方をしなければいけないはずです。しかも、あの時点で人権意識が出てき

てしまったら、おそらくこれは決まりません。

今回、復旧・復興に当たって、特にばらばらになってしまった土地の人たちにとって、今もそうなのですが、今後、何らかのまとまりを保っていけるものは何かあるでしょうか。名古屋ではどうでしょうか、氏子という意識はありますか。都市部では薄れてしまっていますが、ここに住んでいるということは、ここの神様に守ってもらっているということです。それは、承諾するも何も、当たり前のことだったわけです。地域の神社の氏子になりたくないというなら、よそに行けばいいわけです。

ところが、この人権というのは、氏子に入るかどうかを問題にしてしまう。入るか入らないかということは本来そこに住むかどうかという問題ですから、住んでいるなら入らないなんて許されないのですが、人権意識はそれを許す方向にはたらいています。「私は氏子になりません。でも、住みます」というのが認められるのです。今、東北は、これだけばらばらになってもなぜある種の紐帯が保たれているのかというと、同じ神様の氏子であるからです。だから、祭りのときはどこにいても集まろうよということになります。その土地に住んでいるということは、そのままその土地の氏神様に守られているという連帯感になるのです。

これは都市部では薄れてきていますけれども、それを極端に薄れさせつつあるのが、私は人権意識だと思っています。入らない権利があると思っているようですが、私はそれはあり得ないと思います。本人がキリスト教であっても仏教徒であっても、それはいいのです。ここに住むことで自動的に氏子になるということは、こういう危機的な状況で一つの力を発揮しているのです。だから、そういうのが復活してほしいなあと私は思うのです。

先ほども申しましたが、日本人が「こんにちは」とかお辞儀というものを生み出していった心というのは、まず自分自身が無常であろうとしたのだと思います。無常であろうとしながら、しかも深々と積もっていくもの、忘れることができないものもある。我々の心のなかで、両方が同時に存在しているのではないか。

この国には、歴史的に震災が多かったし、これからもあるでしょう。でも、日本人が持っていい希望というのでしょうか、それは「一から出直せばいい」ということです。それもそうですが、しかし日本人はそれだけでなく、地震に対する挑戦もしているのではないかと思うんです。

なぜなら、3.11が来たときも、浅草では着々とスカイツリーを造り続けていました。その後なんら特別な変更もせずに、完成させてしまったでしょう。

仏舎利塔というものがインドでできました。初めは饅頭型でした。それが中国へ伝わって階層型になり、五重塔ができました。それから朝鮮半島に伝わって、五重塔がいくつかできました。しかし今は、中国に１基、韓国にも国宝の１基しか残っていません。

日本には、観光目的のものを除いて五重塔が47基あります。１基１県の割合です。なぜこんなに五重塔を造るのかというと、これは間違いなく地震への挑戦でしょう。現状は47基ですが、かつてあったのに今はなくなったのが５基あります。そのうち３基は、火事の類焼です。もう１基は久能山にあった五重塔ですが、なぜか取り壊しになっています。残りの１基は幸田露伴がモデルにして、『五重塔』という小説を書いた東京谷中の五重塔で、72.9メートルあり、日本一高かった。これはなぜなくなったのかというと、関係性の回復に悩んだ男女がやってきて、五重塔と一緒に心中しようということになって火をつけたのです。暴挙ですよね。要するに、なくなった５基のうち４基は火事、そして、１基は取り壊しですから、日本でこれまで造られた五重塔で、地震で倒れたものは１基もありません。絶対に倒れない自信を持っているんですね。

今、設計士たちは必死に分析していますが、どうしてここがこうなっているのかというのが、どうしても全部は分からないと言っています。しかし、それが免震のためにそうなっているということだけは分かるそうです。五重塔というのは不思議です。ご承知だと思いますけれども、芯柱というのがあります。中心にある柱ですが、これが浮いているのが多いんです。芯柱が土の中にどんと入っていたら、これが揺れたらひとたまりもないでしょう。ですから、五重になった一番上の屋根の付け根のところで芯柱は止めてありますが、多くの芯柱は宙づりになっていたり、何本かに分断されています。揺れるとこの柱が揺れるのですが、建物全体の揺れかたとむしろ干渉し合うように揺れます。そして、不思議なことに、例えばこのように揺れたら、五つの屋根のこちら側が一気にすぼまるというような絵柄が浮かぶかと思いますけれども、そうはならないのです。こちら側がすぼまるとこちら側がすぼまり、こちら側がすぼまりと、交互になるようになっています。とにかく、あの建築技術は地震への挑戦です。そして、無敗を誇っているのです。

だからこそスカイツリーに五重塔の技術を使いましたと言って、あの3.11のさなかも淡々と工事を進めていたのです。あれは東武鉄道のものですから、民間会社です。もし倒れたら、さしもの東武鉄道といえども賠償で吹っ飛ぶでしょう。どれだけの人間が死ぬか。行政は絶対に手を出さない仕事です。しかし、東武は絶対に倒れないという自信があるから挑戦したのでしょうね。

東京タワーも個人のものです。もちろん、行政はああいうものは絶対に造りません。だからこれも民間で、持ち主はマザー牧場の経営者と一緒なのです。あれも倒れたら大変ですけれども、あれだけ踏ん張っていれば倒れないかなという感じはしますね。しかしスカイツリーは見ていると本当に危うい。でも、大丈夫なんです。無常でありながら、一から出直すと言いながら、この技術は蓄積してきています。だから、結構日本人はしたたかだと私は思っています。

放射能の問題も、今のレベルは、はっきり言って私は気にしていません。うちの町が比較的低いということもありますけれども、福島県内のあらかたのレ

ベル、中通り辺りのちょっと高めのレベルというのも気にしてないのです。しかしそれをあまり早く言ってしまうと賠償問題に響いてきますから、言えなかったのです。そうやって放置しているうちに、放射能の低線量に対する解釈がややこしく入り組んできてしまいましたけれども、気にすべきだという考えかたと問題ないという考え方が両方あります。つまり、一番参考になるのは、広島とチェルノブイリです。

広島は原爆が落ちたときに、放射能がものすごく飛び散っています。被爆者の数もすごい。しかし大量に被爆しておきながら、2005年に広島市は、世界のある人口以上の都市の比較で、世界一の長寿を実現しました。広島市が世界一長寿で、出生者の死亡率が世界一少ない、出生奇形率が世界で２番目に少ないという町になりました。なぜそれができたのか。

広島の人たちは、誰も放射能を怖いとは思っていなかったからです。原爆は怖かった。でも、放射能に対するストレスは全くなかったので、身内を助けに翌日から入っていきました。そして身内も被爆者になったわけですが、チェルノブイリはそれより被爆量が少ない人でも、年間５ミリシーベルトを超えるエリアは、何年も経ってから居住禁止にされたのです。このストレスと、そのころは放射能に怯える傾向も定着していました。将来のがんに怯えながら暮らしていて、チェルノブイリは寿命を９年縮めました。広島は、特に女性ですが、世界一の寿命を実現しました。そういう意味で、ストレスを持ちすぎることが自分を苦しめるということもよく分かりました。

だから、二段構えと言っては変ですが、一つの考えではなくて、やじろべえのような状態で人々の心は揺れています。新しいことが起こってくると、また揺れて新しい重心を探すというか、そういう暮らしかなと思います。でも、いろいろなことが新たに更新されていくので、それはそれでなかなかのフロンティアライフではないかと思っています。

うまくまとまっていないと思いますが、ご静聴どうもありがとうございました。

司会（川浦）：玄侑先生、どうもありがとうございました。

フロアのほうから質問、あるいはコメント等がありましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

質問者１：震災後のことで、遺体でなく、服を棺に入れてお葬式をしたという話がありましたが、もし死んでいたらお葬式をしないと戻ってこれなくなるとおっしゃってましたが、どういうことでしょうか。

玄侑：お盆に亡くなった人が戻ってくるという考え方は、疑いなくみんなそう思っています。ところが、お葬式は向こう側に行けというような儀式だと思ってますよね。そうすると、向こう側に行ってないのに、行ってなかったら戻ってこられないじゃないですか。ですから、戻ってくるためにもお葬式をやる必要があるという、そういうことです。

お盆というのは、仏教の話とたまたまぴたっと重なったのですけれども、日本人はお盆の時期にもっと古く仏教以前から先祖祀りをしていたようです。だからどうやらお盆に戻ってくる世界も仏教の極楽浄土とは思ってないのです。

かぐや姫が月から来ますよね。竹取物語を読んでいると、月にいたころは人情が通じなくて困ったというように書いてあるのですけれども、月が死者の世界だと思っていた節があるのですね。それで、一刻も早く戻りたいと言って、キュウリのウマに乗って戻ってきて、帰りはゆっくりナスのウシに乗って帰るというのは、どう考えてもかぐや姫の世界ですよね。ご参考まで。

司会（川浦）：ほかにいかがでしょうか。

質問者２：今日はありがとうございました。

最後のほうの人権のお話でちょっと分からないのが、今の時代にどこまでの人権が望ましいのかなあというのが質問したいことです。

というのは、戦前は国家権力が非常に強くて、国に逆らう人は拷問をしたりして統制してましたよね、抑えてましたよね。その反省があるものですから、今度はGHQ主催で、国がそういうことをしてはいけないということで、下から目線で国を統制しているのが憲法のような気がするのですね。そこでみんな自由を勘違いしてしまって、なんかしっちゃかめっちゃかなことばかりやっていると、まとまりがないというのを年寄りが悲観しているわけですね。

そこで、今の時代の中で、人権のありようというのはどういうことなのでしょうか。

玄侑：私の個人的な見方かもしれませんけれども、ある集団がまとまって人権を主張するということも、ときにありますよね。例えばここに何かをつくるということに反対するとき、このまとまりは俺はいやだよという形で、内部からぶち壊していく力が出てくることがありますが、これが人権なのです。要するに、人権というのは、横のつながりをぶった切るように働くことが多い。だから、たまたま利害が合うと、同じ人権を振りかざして一緒になって戦うということがありますが、最終的に人権を言っていたら一人一人ばらばらになりますよね。協力しない権利があるというところまでいってしまうわけです。要するに、みんなが協力して何かをするということは、誰かが何かを飲み込むというと変ですけれども、やはりみんなの共通の利益のために何かを飲み込むという発想をしていかないと、話がまとまっていかないわけです。

でも、人権というのは、それは誰かがやらなければならないかもしれないけれども、俺はいやだよという話なのですね。全員がそれを言ったら、もうお終いなのです。だから、あの早い時期に人権という意識が出てきたというのは、もうぶち壊しの話なのですね。

だから、ゴミ焼却場でもそうですが、中間貯蔵施設ともなるとなおさら、うちの町だけはいやだとみんな思っているわけです。それを認めるのが人権らしいですけどね。

よろしいでしょうか。

司会（川浦）：あと一つ、二ついただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

質問者３：ご講演どうもありがとうございました。

先ほど先生のお話の中にもあったのですが、幸福度が最も高いブータンのお話がありましたけれども、今、この国では年間３万人を越える自殺者を生み出しています。僧侶の立場から、ブータンと比べてこの国は何が足りないのか、あるいはそういった違いというのは、GNPでは結構いいところにいっているのですけれども、どこの部分が問題だと思われるか、お聞かせください。

玄侑：12年間３万人を超えっぱなしで、本当に尋常じゃないことです。よその国では自殺というのは、たいがい男性の特権なのですけれども、女性の自殺率が今、日本はどんどん高くなっています。それも一つの特徴ですけれども、生きにくさというのはいろいろ絡んでいるとは思うのですが、日本人は亡くなった人に優しいですね。自殺をした人を責めません。自殺者は葬式をやらないなんて言いません。まして、エラスムスのころみたいに自殺者は泥沼に捨てますというような懲罰は一切ありませんし、丁重にお葬式をやりますし、「こういう死にかたでも成仏できるのでしょうか」と訊かれますから、「できます」と答えます。

だから、起こってしまったことはしょうがないじゃないか、と考えている。その死をおとしめないような解釈をするというのは、お釈迦様もそうだったのです。自分の弟子が自殺してしまった。もちろんしてはいけないと言っていたのですけれども、してしまったというのは、あの人の自殺はどうなんだとほかの人から責められたときに、彼は自殺する直前に解脱に達していたとお釈迦様はおっしゃったのです。リップサービスと言っては悪いですけれども、やはり死者をおとしめないという考え方はあると思うのですね。

もちろん、私はそれをおとしめれば減るということを考えているわけではないのですが、なぜこんなに苦しくなってしまうのかというのは、やはりすべてを競争にしてしまっている、新自由主義と呼ばれる考え方は問題が大きいと思いますけどね。福祉の世界も教育の世界も、経営的に勝ったほうが残ればいいと考えてしまった。今度参加するかもしれないＴＰＰでは、はっきりと学校と病院はサービス業という括りになりますね。

私も病院の経営審議委員というのをやっていると、ときどきいやになります。医療経済学というのは、どれだけもうかる患者かというのがあるわけです。私の友達は病院の学部長になれと言われて、学部長になったらここまで見てもらわないと困ると、「もうかる病気一覧表」というのを渡されたそうです。それで、彼はもうやれないといって辞めてしまいましたけれども、病院がもうかるようにするにはどういう患者を増やせばいいのか、どういう患者を断ったほうがいいのか、そういう経済の話なのですね。

どこから入ってきた考え方なのか、誰がこの国を売っているのか分かりませ

んけれども、みんなが苦しむようなシステムを作っている人がいます。私は、やはりそれが非常に大きいような気がしますね。だからといって、死んではいけないとは思いますけどね。

やはり個性はペルソナですから、神様からいただいた美点だと思っているわけですね。美点を伸ばしましょうと言われても、簡単には伸ばせないし、美点じゃない私の部分はどうしたらいいのか。手癖が悪いやつだというのも、美点ではないけれども、一つの特徴です。手癖の悪さをうまく使うとすごい職人になるかもしれませんが、今の社会は、そういう褒められないことを続けていく気力がわかないのですね。私だって、小説も、小説として完成して、これは小説ですと言われるまでは、ずっと褒められないわけですよ。「何やってるんだ、あいつ」という境遇を続けていかなければならない。誰でもそれをやる時間を持たなければいけないと思うのですけれども、褒められもせず、けなされてばかりのことを続けていくのは大変やりにくい世の中なのではないかという気がしますね。ご参考まで。

司会（川浦）：よろしいでしょうか。

それでは、先ほどお手を挙げていただいてましたので、申し訳ありませんが、短くよろしくお願いいたします。

質問者４：今日はありがとうございました。

死者との関係というか亡くなられた方との関係ということで、先日、僕の友達が亡くなったのですね。それは僕にとって初めての体験でしたので、どういうふうにかかわっていったらいいのかなあと思っています。

その友達というのが、僕が気を遣ってこんなことをしたらいいんじゃないかなあと思うと、やめなよみたいな感じで、いつも怒られたりしながら付き合っていた友達だったので、今までどおりこんなことをしたら喜ぶかなあという形で付き合っていくのがいいのか、それとも、先ほど「こんにちは」という話がありましたが、忘れていくといったらなんですけれども、引きずらないほうがいいのかなあということを素朴にお伺いしたいと思ってご質問させていただきました。

玄侑：親しい友人が一人亡くなったわけですから、自分に何の変化もなかったということはあり得ないので、あの死をきっかけに私はこんなに変わりましたということが一つの供養になるという側面はあります。だから、あなた自身が変わるきっかけですよね。

でも、変わらないでいたいという部分もやはりあるだろうと思います。変わらないことと変わることというのは両立するのです。もっと言うと、変化しないものが変化してしまうのです。

つまり、松の木があるでしょう。松の木は葉っぱを毎年落としているので、ずっと緑でいられるのですね。あれがもし造花のビニールだったら、単に古びていくだけじゃないですか。ですから、人知れず、変化することで変化しない

でいられるというのがあって、変化と無変化は両立するのです。だから、自分の中で大きな変化も起こらないといけないと思うし、そうであればこそ変わらない部分が見えてくるという構造だと思います。

質問者４：ありがとうございます。

司会（川浦）：ありがとうございました。

時間になりましたので、これで講演を終了したいと思います。

玄侑先生、長時間にわたりましてのご講演、本当にありがとうございました。拍手をお願いいたします。

玄侑：どうもありがとうございました。まとまりのない話で失礼しました。

司会（川浦）：万葉の時代からスカイツリーに至るまで、さまざまな話題をいただいてのご講演となりました。私たちの中に住む龍も今日はたくさん食べる物があって、夢に出てくるかもしれません。

皆さんにおかれましては、アンケートがお手元にあるかと思います。一言でも何かお書きいただいて、出口のところで出していただければ幸いです。

本日はお集まりいただきまして、本当にありがとうございました。

（終了）